

大澤俊夫著『師の心を求めて』 モラロジー研究所、二〇〇五年

—精神伝統と心を一つにして—

小山 高正

一、はじめに

大澤俊夫先生が書かれた文章は、モラロジー研究所ならびに広池学園の行事や集会などの節目節目に『研究所所報』や雑誌『れいろう』または『社会教育資料』を通して読ませていただいていたが、そこで受けとめたメッセージやインパクトも記憶の残滓となっている状況であったのが、今回の『師の心を求めて』によって、系統的にまた集約的に読むことができるようになったことは、なによりも筆者の喜びとするところである。先生の廣池博士への並々ならぬ思いは、旧著『青年教師広池千九郎』を読むことで十分伝わるはずであるが、本書ではさらに、昭和二十年代のまだ京都大学の学徒として研鑽を積まれていた頃の論理的思考に貫かれた文章、また広池学園にもどられ教育の道に入られた同じく昭和三十年代の理想に向けた熱意あふれる文章から、先生の博士と学園に対する熱い情熱のほとばしりを私は感じた。例をあげれば、巻頭の「後世への最大遺物」は満三十歳、巻尾から二つ目の「福沢諭吉における自立教育の立場」は同じく二十七歳、ま

だ戦後日本の将来が見定まらない時代に高い理想を掲げられた格調高い文章には、今の同年代の若者は舌を巻くに違いない。これらをふくめて、若い世代に対して含蓄深いメッセージを発信していることが最初にあげておきたい本書の特色である。以下特筆すべき本書の特色を順に見ていくことにしよう。

本書は、「学祖の精神を述べ伝える」「モラロジーの教育」「出会い」「論考」の四部構成になっている。それは廣池博士の事績を踏まえた廣池千九郎論や歴代の精神伝統との出会いからはじまり、学校教育・社会教育発展に対する無私の傾倒、またモラロジーの学問的発展の道筋を明らかにし、生涯かけて深められた大澤先生の思索を辿ることができるようになっていく。しかし、そこを貫いている先生のモラロジーへの姿勢はじつに明快で、ことごとく伝統中心であること、まったく学問的であること、そして先生自身がまさに求道者であるということである。そのことは、先生が十七歳で学園へ入寮され勉強を進める中で「人間として一番大切なことは、伝統に安心を与えることだ」(二四六頁)と確信されたときから、開発責任者として先輩諸氏を前に「モラロジー教育の核心は、伝統、とりわけ『精神伝統に従って道を行う』ことです。」(二三七頁)と明言されたときまで貫かれている姿勢に他ならない。その意味で、本稿のタイトルにつけた「精神伝統と心を一つにして」は、本書の各所にフラクタルのごとく埋め込まれた構造なのである。

二、第一部 学祖の精神を述べ伝える

第一部は本書の根幹をなす部分である。その第一章は、『廣池千九郎日記』(以下『日記』) 公刊以降に展開された廣池千九郎論を多面的に示している。巻頭論文は、廣池千九郎の名前は出てこないものの、「昭和三十年という不安に満ち混乱のままの」歴史的社会的現実の中にあつて、名に惑わず、利に走らず、人間的義務を顧慮しながら、常により善く、より正しく生きるべく魂の探求に心を傾けながら、誠実な努力を尽くしたい」(二三頁)というモラロジー的生き方を、廣池同様魂の救済を道とした内村鑑三の「後世への最大遺物」を通して訴えたものである。それに対し、次項の「麗澤人としての責務と課題」は、学問的業績を通じて読者を廣池千九郎に直接引き合わせてくれるのだが、そこでは歴史学者、事典編纂者、文法学者、律令学者、神道学者、法理学者、そして救済者(道徳科学者)という多面的な廣池に出会うことになり、戸惑うことが予想されるのである。そこで文末に、内田智雄同志社大学教授による言葉の引用、すなわち「博士の学問領域はまことに広いが、然し博士の広範囲にわたる全著作も、廣池博士という人格の上に、みことなひとつの体系をなしている」(七四頁)という視点こそが廣池千九郎論の柱の一つであることを教えられる。さらに以下の三つの論文は、お互いに密接に結びついている。なぜなら、後述のように下程勇吉先生が研究所に入られるきっかけは、公刊前の『日記』に出会ったからであり、先生はそこに「最高道徳的精神悟得のすまじい魂の覚醒の過程」(二〇二頁)を読み取られたからであった。「廣池千九郎の人間学的研究」において、下程先生がいみじくも指摘された「普遍的な倫性の地平において、最高道徳学の体系を確立して、人心の開発・救済に挺身する」廣池博士の姿こそが、戦後の廣池千九郎論のもうひとつの柱であるといえよう。続く第二章、第三章は、大澤先生がまさに魂の覚醒を受け、無私の傾倒に至ることになった歴代の精神伝統との出会いが述べられているが、じつはそれは戦後のモラロジー発展の歴史そのものを示すものであり、また見方を変えれば大澤先生の精神的変遷ともいえるものである。廣池千九郎理事長がかけて下さった「学園の近代化を

一緒にやろう」という声への感動が、おそらくは最終部の「福沢論吉に基づく自立教育論」へとつながっていったのであろうと推察するのである。

二、第二部 モラロジーの教育

第一章は、寮生活の意義と専攻塾開塾の経緯を説明しながら、廣池博士が理想とされた教育の本質を意義や目的という具体例の中に伝えようとするものである。麗澤大学が全寮制の時代であったとはいえ、筆者が現在本務とする大学の元学長と同窓会理事長を唸らせるエピソードがあったということは、卒業生としてうれしい限りである。さらに昨年、英国ケンブリッジ大学に学ぶ卒業生の案内で見せてもらったエマニエル・カレッジで筆者自身感じたことであるが、建物の形式こそ違うものの、チャペル（神）を中心とした生活の有り様は、自分がかつて学んだ麗澤の学舎を彷彿とさせるものであった。廣池博士が求めたものの高さに驚くと同時に、そこで学ぶ機会を得たことへの感謝の念がなお一層強まったのであった。また、国際経済学部という新学部がつけられても、廣池博士がめざした「人を生かし幸せにする教育」「日本を立派にする教育」「世界に平和をもたらす教育」（一九九―二〇〇頁）の理想は、微塵も揺らぐことなく生かされていることがわかる。麗澤がセンター・オブ・エクセレンスとして、学祖の思想と精神という「高次の価値観の共感」（一九〇頁）のうえに、ますます発展することを著者と共に祈りたい。

第二章は、モラロジー会員に向けてのメッセージではあるが、廣池博士没後五十年以降、とくに千太郎理事長逝去という事態に直面し、団体が最も難しい局面に立たされたときに発せられた、いわば伝統回帰への真剣な訴えになっている。しかし、大学の新学部設立、専攻塾開校など大きな発展をなした時期でもあることを考えると、それも会員全体に課された運命的試練であったともいえるであろう。章のタイトル「伝統に安心をいただく心で開発を」は、いつであろうとも、どこであろうとも、何をすればよいのかという基準を、われわれ会員に指し示す言葉に他ならない。最後に引用された孔子第七十七代裔孫の孔徳成先生が谷川講堂のために揮毫された「水に原（みなもと）あり、木に本あり」（二四六頁）こそ、この章を締めくくるにふさわしい言葉であったといえよう。

四、第三部 出会い

大澤先生はモラロジー研究所が戦後出版した重要な文献の刊行に関わってこられた。第三部を読めばわかるように、内田智雄編著『生誕百年廣池博士記念論集』、山岡莊八著『燃える軌道』、下程勇吉著『廣池千九郎の人間学的研究』、そして『廣池千九郎日記』『伝記 廣池千九郎』である。それぞれの著者と大澤先生との出会いには物語がある。しかし、それは先生との出会いでもあるが、著者と廣池千九郎との出会いでもある。

「内田」先生のひたむきな先学顕彰の活動を突き動かしたものはなんであったのでしょうか。／おそらくその要因の第一は、なんの学閥、閥閥もなく、まったくの徒手空拳、独学をもって学問の道にいきみ、新分野を拓いてこられた、博士の壮絶な生きざまへのヒューマンな共感と敬慕、第二は不当に軽視

されてきた法制史家廣池博士の位置づけに対する公憤と後進学徒としての責任意識、第三は千英先生のご尊父に対する篤い孝心と純粋なお人柄への敬慕の念であったと思われます。」(二九八頁)

「当時の博士を直接知られる「天理教」幹部の方数人にお集まりいただき、対談しました。お話の途中、「山岡」先生は、たびたびポケットからハンカチを出されては顔に当てておられました。私は狭いホテルの一室でしたので、汗をお拭きになっておられるものばかり思っていました。(中略)話がここに及んだとき、山岡先生はこらえきれず、声をあげて泣き出されてしまいました。(中略)その夜、先生は、「これで廣池先生が書ける自信がついたよ」と、涙を拭いながらも晴れ晴れとおっしゃられました。」(二七七―二七八頁)

「その発表会の中で、ある研究員が『廣池博士日記』の内容について触れたところ、下程先生は非常な関心を示され、『ぜひ一読したい』と申し出られました。(中略)早速、通読された下程先生は、『廣池博士日記』を研究したいとの思いを強くされた様子で、千太郎先生に宛てて『ぜひ私を一研究員として加えていただけないでしょうか』と請われたのです。(中略)下程先生は『廣池博士日記』を通して、廣池博士が真に『慈悲寛大自己反省』の精神を体得された、大正四年の困厄に注目されたのです。大正四年の困厄こそ、廣池博士が『熱心の弊』をはじめ、普通道徳と最高道徳の本質的違いを悟得された恩寵的試練であったと捉えたのです。」(三〇四―三〇五頁)

この第三部を読むと、紙面の都合でここではあげることができない日本を代表する一流の学者と廣池千九郎との出会いに、大澤先生が立ち会われたことがわかるであろう。その意味で、この第三部によりモラロジーが戦後、より学問的に確立されてきた過程を史実として辿ることができるのである。

五、第四部 論考

本書最後の第四部では、生涯かけて深められた大澤先生の思索が二つの論文として展開される。はじめの「福沢諭吉における自立教育の立場」は、三〇―三二頁で明らかにされているように、紆余曲折を経てまとめられた京都大学卒業論文である。当時二十七歳、今でいう修士論文に込められた大澤先生の思いは、講和条約締結後とはいえ日本の将来には暗雲立ち込めていた時代、「幾百万の尊い人命をそこない、莫大な資力を徒費したそのあがないとして得た民主主義も……無視されんとしている状態」(三二頁)を深く憂い、ちよと「兵火絶えざる開国攘夷の物情騒然たる時代に身をおいた福沢諭吉」(三二〇頁)のそれに重なるところがあつたと思われる。千英理事長の「学園の近代化を一緒にやろう」という声を背負い京都に来られた先生であつたが、自分の学問的境界に突き当たり、悩み苦しんで摸索し突き出た先の人間像は、独立自尊、自労自活、愛国の人、「男も人なり女も人なり」という諭吉が指向した近代的人間像と共鳴したのであつた。軍に組せず、研究所を發展的解消するという苦渋の選択をされた千英理事長の胸中に思いを馳せたとき、「徒に官を頼み、官を恐れ、官に諂う『独立の丹心』なき人民の傾向」(三四八頁)を憂えた諭吉への共鳴は自然であつたのかもしれない。否、それ以上に「文明の実学」、科学的合理的精神の重要性を強調した諭吉

の思想は、奇しくも同郷であったという事実を超え、廣池千九郎の教育精神と相通するものを大澤先生は感じられたのではなからうか。それはそれにしても、「精神の自主独立と合理的実証主義に基礎づけられた学問と生活の実学的統一を一貫して標榜し、節を枉げず、権力に屈せず、勇氣をもってその思想を實踐していった福沢諭吉」(三三二頁)に見る自立教育の出発点は、北川治男氏をして「大澤先生の若者を凌ぐ理想主義的精神の前に、中途半端にプラグマティックな私はいつもたじろぐばかりで」(「傘寿記念文集」二四九頁)と言わしめた先生の理想を求める情熱の濫觴になっているという推察もあながち間違いはあるまい。

第二論文の杉浦重剛による昭和天皇御学問所倫理科担当担任拜命の顛末は、杉浦重剛という明治の偉大な人物を通して、国家伝統へのお仕への仕方を明示してくれたものである。杉浦という人は、明治という時代が醸成した「財も欲しがらず、名も欲しがらず、命がけて仕事をする清節の人」(三五四頁)であったが、こういう人が重大な役割を引き受ける際の覚悟の仕方が何ともすばらしい。「浜尾副総裁から内意を伝えられて以来、その光榮に無常の感激を覚えながらも、他面、責任の重大さに身の引き締まる思いであったのであろう。連日先輩知友を訪ねて意向をただし、家族を集めて覚悟を促す。」(三五七頁)また、「小村「寿太郎」、佐々木「高行」、乃木「三郎」に墓参りをしている(三五六頁)。ただひたすらにお仕への姿に、感動しないものはいまい。さらに、杉浦が御進講のなかで言及した「純潔、温雅、進取、犠牲の精神を日本の国民性と捉え、とりわけ国家のよって立つ倫理的基礎は知、仁、勇の三徳にある」(三六二頁)という根本的な立場の中に、廣池博士が二度の恩寵的試練のうえに到達した慈悲寛大自己反省の人間性に相通するものを感じざるを得ない。また若き頃、英国で化学を専攻した故と思われるが、その講義は単なる倫理ではなく、「科学の精神」というものが見えないところに一本とおっていた」(三六八頁)というのも、モラロジーを打ち立てた廣

池博士の科学実証主義的思考と重なるものを感じさせられるのである。いずれにしても、賀陽宮様への命がけの御進講という博士のご覚悟を、はからずも杉浦重剛の御学問所担任拜命の顛末に垣間見た気がしたのである。

六、おわりに

文頭ですでに触れたことではあるが、本書は、モラロジーの本質を単に学問的だけではなく、自己を啓発する真に実践的意味から、麗澤に学び、理想に燃える若い人へ伝えるメッセージである。もちろん、われわれモラロジー研究者にとつても、モラロジーの学問的価値を再確認するうえで重要な文献であることには間違いない。著者の大澤俊夫先生はその学問的価値を再確認する歴史に立ち会われてきたのである。それらの史実から、モラロジーの学問的特長は、歴史学的、文法学的、律令学的、神道学的、法理学的、倫理学的なところばかりでなく、魂の救済を主とする道徳科学的実践にあることを知ることができた。だから、深重な知識を備えた学者であっても、おそれとそれを探求できるわけではないのである。廣池博士が「聖人の追体験」(九二頁)をされたように、われわれは博士の追体験をすることによってのみ、モラロジーの深淵を感じるができるというのではないか。本書を読み、一学徒であった大澤先生が、モラロジーに出会い、京都での思考試練を経て、生きた精神伝統にお仕えしながら、さまざまな学者との邂逅のなかで、学問としてのモラロジーの高まりを実感されていた、その様子を見せてもらうことができたといえよう。しかし繰り返しになるが、それは先生が一学者という立場でいらしたならできるはずのなかつたことである。福沢がいみ

じくもいう「思想の深遠なるは哲学者のごとく、心術の高尚正直なるは元禄武士のごとくにして、これに加うるに小俗吏の才能をもつてし、これに加うるに土百姓の身体をもつてし、はじめて実用社会の大人たる」(三五―三五二頁)人物なるがゆえにできたことといえるのではないだろうか。本書を読む機会を与えてくださったことに感謝し、また大澤俊夫先生のご健康とご長寿を心から祈念しながら、筆を擱くことにする。